

「96条改定」に異議

「（憲法は）占領時代の仕組み。真の独立を取り戻すために作り直す必要がある」「参院選で堂々と96条改正を掲げて戦うべきだ」――4月23日、安倍晋三首相の参院予算委員会での発言

5月上旬の朝、名古屋 天白区の市民団体 屋市天白区の地下鉄駅「平和を愛する大坪9条の会」（150人）前に主婦や自営業者ら8人が立った。「私たちが、駅前で月1度の護ち憲法96条の改定に憲活動を始めたのは今年2月からだ。安倍政が、国防軍を許し、権が改憲手続きのハイポストを掲げた。ドルを下げるため、96条改正を主張し始めたことに危機感を抱いた。」「憲法が変えられそうなんだよ」

戦争経験者「平和」背負い

「軍」化などが盛り込まれている。「安倍政権の真の狙いは（戦争の放棄などを定めた）9条改定にあるのが透けて見える。平和主義という国の基本を安易に変えられるのならば、憲法が憲法でなくなる」。同会の事務局長で元学園理事の服部平和さん（75）は訴える。

服部さんは、日中戦争の端緒となった盧溝橋事件が起きた1937年に生まれた。キリスト教伝道者で反戦主義者だった父の治さん（故人）に「平和」と名付けられた。男子は「勝」の文字が付く名前が多かった時代だった。

登校時、上級生の命令で米英兵を模したわら人形を竹やりで突か

された。空襲避難訓練で地面に伏せると上級生に踏みつけられた。疎開先の長野では、父の反戦思想を知った子供たちに「スパイ」「非

国民」となじられ、石を投げつけられた。理不尽な過去を二度と繰り返してはいけないうい。そんな平和への強い思いが2010年の「大坪九条の会」設立の原動力になった。

2年前、地元の集会所で例会を開こうとした。確認された。服部さんは「足元の理不尽なことを許さない。その姿勢が憲法を守ることに通じる」と話す。

「九条の会」は小泉政権下の04年、文化人らの呼びかけで全国に7500団体以上が結成された。その後、休眠状態になる団体もあったが、96条改正の動きに再び各地で活動が活発化しつつある。

「名付けてくれた父の思いを地域に広め、未来へも継承していきたい」。平和の名を背負ってきた服部さんは今年19日にも、メンバーと共に駅前立つ。

【花岡洋二、写真も】



「高支持率」のウラで

― 検証・安倍政権